

氏名	友岡 真秀
ヨミガナ	トモオカ マホ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第557号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 コジモ1世時代のフィレンツェにおける噴水彫刻 〈作品〉 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	越川 倫明
（論文第1副査）			（）	
（作品第1副査）			（）	
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	田辺 幹之助
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	佐藤 直樹
（副査）	茨城大学	教授	（教育学部）	甲斐 教行
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

メディチ家の傍系（弟脈）出身のコジモ1世は、1537年に2代目フィレンツェ公爵の地位を世襲した直後より、都市機構の再編と改善に着手し、その一環として同地における水路網の整備を推進した。その結果、都市部に新鮮な水を安定的に供給することが可能になり、この功績を顕示するために、宮殿付属の庭園や都市の広場を舞台として、彫像群をはじめとする豊かな彫刻装飾を施した複数のモニュメンタルな噴水がはじめて造られるようになった。

先行研究では、主に現存する作品について制作状況の跡づけや初期構想の復元をめぐる考察がなされてきた。噴水に関する先行研究は、ワイルズ（Wiles 1933）がフィレンツェの彫刻家による噴水を網羅的に取り上げてその形式分類を行って以降、20世紀後半にはハイカンブやウッツ、フォッリオットを中心として、各噴水およびそれらの造営に携わった同時代の彫刻家に関する個別研究が進展した。これを受けてモレ（Morét 2003）が作成した16世紀のイタリアで造営された噴水のカタログ・レゾネは、ワイルズの研究書を飛躍的にアップデートさせた。しかし最終的に実現に至らず計画案のみ知られる作品や、制作者や計画が大幅に変更された作品の初期構想をめぐる議論は今なお研究の初期段階にあり、モレの研究書においても除外されている。一方で、フォースター、リチェルソン、コックス＝リーリック、ファン・フェーンを筆頭に、コジモ1世の対外的なイメージ戦略に関する考察が進められてきた。噴水は、そこに投影された図像プログラムによって君主の威信を表明する大規模なモニュメントとして機能するものだったが、コジモ1世時代に計画・造営された一連の噴水を横断的に取り上げ、図像解釈を通じてそれらの連関をひもとく姿勢は、依然として希薄である。本論文は、この状況を踏まえ、コジモ1世の委嘱で計画された噴水を考察対象として、そこに投影されたプロパガンダを同公爵による文化政策の枠組みのなかで連動的に読み解くと同時に、公国内の彫刻制作の動向を明らかにしようとするものである。

第I章は総論とし、噴水制作が興隆した歴史的背景を確認することを目的として、コジモ1世の統治体系と水路整備事業を総括した。都市部への取水と水路網の拡充に関しては、水源の確保に伴って貯水

のために整備された庭園の研究のほか、近年は土木・建築的観点からの研究が飛躍的な進展をみせている。こうした関連分野の先行研究および調査結果をもとに、第2節ではコジモ1世時代の水路整備を事業の行われた時期と地域にしたがって4区分し、噴水制作の観点からその全貌を示した。

第Ⅱ章では、コジモ1世以前の水場の系譜を示した。まず同公爵の統治以前のフィレンツェにおける水の供給状況と利用形態を確認し、次いで中世に水路網が整備されていた地域で造営された噴水に加え、水路が未発達であった15世紀までのフィレンツェにおける噴水（事実上の水場）の作例を総括した。さらに、コジモ1世時代のフィレンツェで造営された噴水の範例として、16世紀前半にジョヴァンニ・アンジェロ・モントルソリがメッシーナとジェノヴァに実現した4基の作例に考察を加えた。

第Ⅲ章と第Ⅳ章ではシエナ共和国を併合した1560年を境としてコジモ1世の治世を前半と後半に区分し、各期間にフィレンツェで計画された噴水について、先行研究において未解決のトピックを設定して分析を行った。その結果、図像の共有や、同時代に生み出された新奇な造形様式の積極的な受容の実態が明らかになった。また各噴水は、それらが計画された時期に実現されたコジモ1世の具体的な功績と結びつけうるものであることを、図像解釈を通じて新たに提示した。これは、一連の噴水を総じて君主の善政と水路整備事業の称揚という文脈に帰結してきた従来の解釈に一石を投じるものである。第Ⅲ章で扱う3基は、いずれも水源から都市部へ向けた給水の拠点として機能する庭園に設けられた噴水であり、第Ⅰ章第2節第1、3項にて俯瞰したフィレンツェ郊外の水路整備事業と連動して企図された。これまでカステッロの噴水2基《迷宮の噴水》と《ヘラクレスとアンタイオスの大噴水》については、フィレンツェの水脈の視覚的再現とコジモ1世の善政の象徴として解釈されてきたが、新たにコジモ1世の登位前後の軍事的功績を反映するプログラムを読み取った。一方、菜園としての機能が重視されたボーボリ庭園では、中央に企図された噴水（後の《オケアヌスの噴水》）は単独で解釈されてきた。しかし同庭園が公妃エレオノーラの資金によって都市部への取水の拠点として整備されたことに照らし、噴水はエレオノーラに捧げられたものである可能性を示した上で、シニョリーア広場に公爵が計画した《ネプトゥヌスの噴水》と呼応関係にあると解釈した。また同噴水については、計画直後に死去したトリエボロに代わってバンディネッリが1550年代前半に構想していた形態について、現存する一次史料から新たに再構成案を作成し、提示した。

これに対して第Ⅳ章で扱う4基は、都市の中心部に造営された噴水である。これらの噴水は短期間のうちに相次いで計画されたものでありながら、各噴水はそれらが計画された同時期におけるコジモ1世の具体的な功績をリアルタイムで発信するものであったことが新たに確認された。すなわち《ユノの噴水》では、水の生成と公妃の表象という従来の解釈に加え、この直前に公爵夫妻によって認可されたアカデミア・フィオレンティーナの表象を読み取り、公国における学芸の興隆が顕示されている側面を指摘した。また《ヘラクレスの12功業の噴水》の計画案およびこの代替案と考えられる《ヘラクレスとケルベロスの犬の噴水》の計画案には、これらの構想の前年までにコジモ1世が実現したシエナ併合の功績の投影が認められた。次いで《ネプトゥヌスの噴水》では、初期構想から祝祭での仮設、そして最終的な仕上げに至る過程のなかで、同時期におけるコジモ1世の動向を如実に反映したプログラムの書き換えがなされていたことを指摘するに至った。

第Ⅴ章は以上のまとめとし、16世紀における噴水制作の意義を考察した。水源の確保と水路網の拡充を背景として、この時代にはじめて造営が可能になった大型の噴水は、構造形式の自由、物語場面や装飾の挿入、多視点的な動きを備えたダイナミックな彫像群、水の噴出を利用した遊戯--これらをすべて組み合わせることの出来る新たな複合芸術であった。コジモ1世時代のフィレンツェでは、同地出身の最大の彫刻家であったミケランジェロがローマに永住していたため不在であり、メディチ家に寵愛された宮廷彫刻家バンディネッリは1560年に死去している。この状況下で君主の委嘱による公共事業として進められた一連の噴水制作は、同時代の彫刻家が二大巨頭の後継の地位をめぐる競合する好適な機会を提供する新しいフィールドになったのである。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、16世紀に成立したフィレンツェ公国において、公爵コジモ1世・デ・メディチ（1537—74年）の統治下で実現、あるいは企画された大規模な噴水彫刻群を論じたものである。ニコロ・トリイボロ、バッチョ・バンディネリ、ヴィンチェンツォ・デ・ロッシ、バルトロメオ・アンマンナーティといった著名な彫刻家たちが関わったこれらの計画は、郊外の別荘庭園や都市広場に設置され、偉大なミケランジェロの伝統を受け継ぐフィレンツェ彫刻の際立った成果として評価することができる。同時にそれらは、統治者であるコジモ1世によって進められた継続的な治水事業の結果として生み出されたものでもあった。しかしながら従来の研究では、各々の制作プロジェクトが作家研究の枠組みのなかで個別的に扱われるケースがほとんどであり、複数の彫刻家がそれぞれ携わった計画がひとつの継続的な流れのなかで論じられることはあまりなかった。

そこで本論文は、コジモ1世の時代に企画された計7基の噴水を考察対象とし、個々の作品についての考察を深めるとともに、それらを連続的な歴史的文脈のなかでとらえ直すことを意図している。そうすることによって、造営計画を生じさせた基本的な動機や、そこで芸術家に課された要請をいっそう明確化することができ、孤立した作品としてではなく、文脈に位置付けられたものとしての作品の意義をより正確に把握することが期待されたからである。

序章において関連する先行研究を詳細に紹介したうえで、第一章では、筆者は公爵コジモが行なった都市に給水するための大規模な水路整備事業の経緯について、詳しく紹介する。それによって、第三章以降で論じられる噴水の造営がいかなる状況を背景に着想されたかが明確になっていく。この章の内容は独自の研究成果とは呼べないが、彫刻史プロパーの先行研究の枠外にある土木・建築関連の研究を注意深く参照することによって、以降の考察の有効な前提を導いている。続く第二章では、コジモ時代以前の噴水の先例を概観的に考察した。特にフィレンツェ公国における造営事業の先例として重要なのは、ミケランジェロの下で学んだ経験をもつトスカナ彫刻家のジョヴァンニ・アンジェロ・モントルソリが16世紀前半にジェノヴァやシチリアで実現した噴水群である。これらはフィレンツェでの諸計画の直接的な参照源となった。

第三章では、およそ1560年以前に計画された3つの噴水、すなわちカステッロのメディチ邸の《迷宮の噴水》と《ヘラクレスとアンタイオスの噴水》と、ボポリ庭園に計画された《オケアヌスの噴水》を論じた。これらの計画は、大規模な彫刻モニュメントの宿命として、長期にわたる制作期間のあいだにしばしば計画が変更されたり作者が交代するなどの複雑な経緯をもつが、筆者はそうした状況を丁寧に確認しつつ、それらの企画意図や実現されなかった造営計画の復元について、いくつかの新たな知見を提示している。

第四章では都市の中心部に計画された4基の噴水が論じられる。すなわち、アンマンナーティの《ユノの噴水》と《ネプトゥヌスの噴水》、デ・ロッシの《ヘラクレスの12功業の噴水》と《ヘラクレスとケルペロスの噴水》（後者は素描を通じてのみ知られる）である。この章での目立った研究成果は、《ユノの噴水》の構想における人文学者コジモ・バルトリの役割を明確化した知見、および《ヘラクレスの12功業の噴水》の構想初期において彫刻家デ・ロッシが晩年のポントルモによる大規模な壁画装飾から大幅に想を得ていたという新しい知見である。

以上のように本論文は、彫刻や素描の形態の比較、関連する同時代文献の検討、文書と素描に基づく復元考察など、多様な方法論的アプローチを適切に使い分けて、対象とする噴水モニュメント群の研究に、ひいてはフィレンツェのマニエリスム彫刻史の研究に新たな貢献を加えたものといえるだろう。一方、当然ながら、やや論証の弱い部分もないわけではない。そうした個所は、造営計画の年代や図像から、当時の公爵家の政治的関心や出来事との結びつきを論じた部分に時として感じられる。たとえば、《ユノの噴水》をアカデミア・フィオレンティーナの創設と結びつける論などであるが、筆者の仮説は一定の妥当性を感じさせるものであるとはいえ、具体的な根拠づけの点でもうひとつ強い説得力を帯びるにはいたっていない。こうした解釈上の問題は、本来実証の難しい論点ではあるが、今後さらに考察を深めていくことが期待される。

そうした点はあるにせよ、本論文は、かならずしも扱いやすいとはいえない複雑なテーマに真摯に取

り組み、粘り強く考察を重ねることで多くの有効な新知見を導き出した労作として、高い評価に値する。